

## ●牧水、葉桜の血脈今も

椎葉村の熊本県境寄り山地を源とし、諸塚、西郷村、東郷町を流れて日向市美々津まで、全長一〇三・四<sup>キ</sup>、流域面積八百八十一平方<sup>キ</sup>の耳川は、県北の重要河川として、さまざまな文化と恩恵を周辺の町村にもたらし続けてきた。

本流には二十五の支流が注ぎ込んでいる。その一つに、尾鈴山西北から流れ出し、羽坂吐（はざかはき）で耳川に合流する坪谷川がある。全長一八・四<sup>キ</sup>。ほとんど平地のないV字谷の耳川と違って、流域面積六一・九平方<sup>キ</sup>のかがいに利用され、東郷町の稲作地帯形成に役立っている。

流域の東郷町坪谷に歌人若山牧水の生家がある。現在では、その周辺に牧水記念館や牧水公園などが整備され、牧水の愛した尾鈴山の容姿とともに、訪れる観光客を喜ばせている。

牧水は一八八五（明治十八）年八月に生まれ、

坪谷尋常小学校を卒業するまでここで育ち、県立延岡中学に学び、早稲田大学を卒業。中学時代から歌を詠み、生涯、旅と酒を愛した歌人である。牧水の生家から正面に見える、秋も霞のたなびく尾鈴山の美しさと、坪谷川、耳川の豊かな流れが、歌人牧水をはぐくんだ風景だったのだろう。

耳川の流域には、牧水の影響を受けて、数多くの歌人が出ている。西郷村田代の小野葉桜もその一人である。

葉桜は本名を小野岩治、七九（同十二）年六月、西郷村田代小川に生まれている。田代尋常小学校を卒業、延岡の亮天社（延岡藩の私学で、県立延岡中学の前身）に学んだ。牧水とはその作歌活動を通じて早くから親交があった。病気のため、三十五歳で作家活動を断念するまで、すぐれた歌を残している。一九八七（昭和六十

二）年、西郷村でその遺稿歌集「悲しき矛盾」が出版され、広く知られるようになった。

さらに牧水と同じ東郷町に詩人の高森文夫がいる。一〇（明治四十三）年一月、東郷町山陰に生まれた。県立延岡中学を出て、東京大学仏文科に学んだ。中学時代から詩作をはじめ、日夏耿之介や中原中也らと親交があった。中也に言わせると「高森の方が早く詩壇に出ると思っていた」ほどだから、詩人としての評価は高かった。その詩「浚渫船」は四一（昭和十六）年、第二回中也賞を受けた。

牧水、葉桜、文夫と耳川水系はすぐれた歌人や詩人を生んだ。今もその血脈は生きている。

甲斐 勝



坪谷川と牧水公園。若山牧水の生きようが漂う